

# 精神薄弱児の人格変容に関する研究

—— Rosenzweig P-F Study による人格特徴とその変容 ——

# 目 次

は じ め に.....	1
I 精神薄弱児の人格への接近について.....	1
Rosenzweig P - F Study (日本版) について.....	4
II 研究目的.....	5
III 研究方法.....	5
1 研究仮説.....	5
2 調査対象.....	5
3 P - F Study の手続と実施.....	6
4 研究手順.....	7
IV 調査結果とその考察.....	7
1 [仮説 - 1] について.....	7
2 [仮説 - 2] について.....	9
1) 児童標準との比較 (group norm への適用) .....	9
2) 精神薄弱児の一般的人格特徴の考察.....	11
i G C R (社会適応度) の傾向.....	11
a G C R % の高さについて.....	11
b G C R 評点の合致内容について.....	12
a) 全体的傾向.....	12
b) 群別傾向.....	13
ii プロフィール欄の傾向.....	14
a 方向および型の比較.....	14
b 全体的傾向.....	14
iii 超自我因子欄の傾向.....	15
iv 反応転移分析欄の傾向.....	16
3 [仮説 - 3] について.....	17
1) G C R の変化について.....	18
2) プロフィール欄の変化について.....	18
3) 超自我因子欄の変化について.....	19
4) 反応転移分析欄の変化について.....	20
[参考資料] 精神薄弱児の人格変容の事例.....	21
む す び (要 約) .....	23
参 考 文 献.....	25

## はじめに

教育は、人間のまともな発達を援助するいとなみであることはいうまでもないことである。ところでまともな発達とは、社会という生活の場においてその人格の望ましい特性を最大限に発揮させることにほかならない。いゝかえれば、社会に適応しつつ自己実現に志向することである。このことは、正常児の教育についてのみならず、心身の諸機能に障害を有するものに対する教育についてより深く考えられなければならない課題である。なかでも、精神薄弱児は知能の働きに恒久的な障害をもち、その知的能力の発達には限界があるとしても、生理的には成人していくかれらに、社会で一個の社会人として生きていけるように持てる能力を開発し、それを強め適応力をつけてやることは、社会一般の責務であろう。精神薄弱児教育の目標を、正常児にすることではなく、社会的生存に必須な条件、すなわち生理的生存条件、生産者の条件、道徳的生存の条件などをそなえてやることに置くことが必須となるのである。

全国的にかれらのための特殊教育が盛んになり、そこで教育を受けている児童数も増大したとはいえ精神薄弱児の就学に関する制度化も進まず、他方親たちや世間の人の特殊教育に対する理解のなさは、昔も今も変わっていないようである。それは社会全体に望まれる特殊教育に発展していないためであって、そのためには、特殊学級や養護学校にはいる子どもを、自立できる社会人に育てあげるといふ特殊教育のねらいを、関係者は改めて自覚し、教育の成果を、目の前の事実として社会に示すことが必要であると思う。世間体を恐れ、感情的にわが子の特殊学級入級をかたくなに拒否していた親が、普通学級で適応できずに孤立し、友だちに等閑視されていたわが子の特殊学級入級後の変わりように驚く事実を、客観的な事実として、社会啓蒙の資料としなければならないのである。

この研究は、究極的にはこのようなねらいをもつものである。このねらいを果たすためには、特殊教育の全活動面に関する研究を進めなければならないのであるが、こゝでは上述のように、特殊教育の主要目標が「よりよき人格の形成」であることから、精神薄弱児が教育によりこれまでに形成された人格が、どのように変容していくかに焦点を合わせることにする。

## I 精神薄弱児の人格への接近について

特殊学級の教育的効果に関する研究は少ない。そして、その数少ない研究の方法も、主として正常児と精神薄弱児、普通学級と特殊学級の両群の比較というかたちをとっている。吉田博氏はアメリカにおけるこの方面の主要な研究を、あくまで暫定的な性質のものとしながら、次のように要約している。

- (イ) 学業成績（標準テストで測定されたもの）に関しては、一般に普通学級に在籍する者の方がやゝ優秀性を示す傾向がある。
- (ロ) 特殊学級の精神薄弱児は全体として学力は劣るが、低IQ（50～60）では、かれらに対応する普通学級内の精神薄弱児と同程度、もしくはそれ以上の進歩量を示す。
- (ハ) 社会的適応を示す諸種の測定値と比較した場合、特殊学級児の方がやゝすぐれている。
- (ニ) これに反し、普通学級に残された精神薄弱児は、とかく、孤立的な立場に追いやられるか、仲間

から拒否されるかしやすい。

- (4) 文化的に恵まれない環境に育った精神薄弱児に関しては、就学前の早期保育による効果が、とくに著しく認められる。

このように群別比較法による横断面的研究方法は、特殊学級の特異性を明らかにするには適したものであるが、ゴットシャルト (Gottschaldt, K.) の主張するように、現象的なし量的にとらえられる事象の背後にある精神の力動性をさぐるためには、縦断面、すなわち継続的追跡研究によってその個体の全体的発達を究明する必要がある。

精神薄弱児の人格への接近と論争とは、レヴィン (Lewin, K.) のいわゆる「硬さ」(rigidity) に関する問題を媒介として発展してきたといわれる。それ以前の精神薄弱児研究は、記憶、連想、知覚、学習、言語の習得などの量的比較による要素的なものであったが、かれが "A dynamic theory of personality" ("パーソナリティの力学説") の中で精神薄弱児のパーソナリティ特性についてふれ、

- (1) パーソナリティ構造における分化の程度が低く、単に知能水準が低いだけでなく、全体的に原始的、小児的である。
- (2) パーソナリティ構造をつくっている素材の質が硬く、融通性に欠けるため、新しい事態への適応が困難である。
- (3) 包括的な力学的全体内において絶対分離と絶対結合との間の連続的な段階的移行が乏しいため、一か八かといった性格を示す。
- (4) したがって、環境との関係においても懸案のままの状態にいるということを困難にし、(内的葛藤事態にとどまることができず) 対外的には強情あるいは頑固といわれる性格があらわれる。
- (5) 知的な欠陥も、知能の本質を見通し(新しい事態にたいして部分が全体に関連して再構成されること)と考えるならば、心的領域の流通性に乏しい精神薄弱児において知的行動に劣るのは当然である。
- (6) また、パーソナリティ構造の下位の部分が強いゲシュタルトをなして、全体が分割されるから、考え方が具体的であり、抽象作用が困難である。したがって、空想とか想像性が貧弱であるということになる。

と、諸実験の結果をまとめ(同著第7章「精神薄弱児の力学説」より、伊藤隆二氏のまとめによる)、「精神薄弱児がただ『知能の孤立した欠陥』だけではなく、総体のパーソナリティに関係していることは常識」であると結論づけたことからこれを契機に精神薄弱児をパーソナリティの欠陥として把握する研究が、盛んになってきている。

このような研究方向にそって、全体としての人格を把握する方法として、また、人格の力動性に接近する方法として、すなわち、精神薄弱児をも「個人」として個体的に力動性を有するものと考えて、その特性を把握しようとする方法としては、投影法 (projective method) を代表的なものとして挙げることができる。その中でも最も多く用いられているのはロールシャッハ・テストとT.A.T.である。

ロールシャッハ・テストによる精神薄弱児のパーソナリティ特性として、藤本文郎氏は防衛的態度、知能の低下、人格の未成熟、情緒障害、衝動性、自我発達の欠陥、内的不安定性、非社会性の諸側面をあらわすプロトコルを得ている。また、大西憲明氏はテストの結果を考察して「精神薄弱児のパーソナ

リティの独自の内的世界が確実に投影されるかは問題になるが、精神薄弱児の具体性、即物性、常とう（套）性と紋切型、固執性、瞬間性とよばれる傾向がみられ、適応の柔軟さの乏しさが推測された」と述べている。このほか、サラソン（Sarason, S. B.）の内因性精神薄弱児の研究、ウエルナ（Werner, H.）の内因性と外因性の精神薄弱児の比較、ベック（Beck, S. J.）による精神年齢段階による反応特徴の研究などがあるが、それらの研究はおおむね共通した特性を把握しながらも、必ずしも一貫した結果を示しているとはいえない。T. A. T. はロールシャッハ・テストとともに投影法の代表的なものである。しかし、このテストを精神薄弱児に実施した研究は少なく、よりいっそう、非一貫的な結果となっている。それは、このテストが単なる絵の説明ではなく、物語を構成させるというより多くの言語的表現を必要とするところに、精神薄弱児への適用に、自ら限界があるものと考えられる。したがって、ロールシャッハ・テスト T. A. T. は人格検査としてはすぐれたものであるが、精神薄弱児にこれらのテストを適用することの妥当性・信頼性が当然問題となってくると考えられる。

この研究でとりあげようとする Rosenzweig Picture-Frustration Study（ローゼンツアイク・絵面欲求不満テスト、日本版）も投影法の一つであって、この場合も示された絵をみて、その場面を想定し、自己の態度を述べるという高次の思考を必要としているため、精神薄弱児に適用する場合には限界があるものと考えられるが、この P-F Study の児童用が、4才～14才であることから、一谷彊氏は精神薄弱児においても精神年齢が4才程度以上に達しているものは適用可能であろうとの仮説をたて、実証的に考察した結果、M.A.5才およびそれ以上は適用可能、M.A.4才では半ば理解し、半ば理解不可能な段階で M.A.3才以下の全く適用不能な段階との移行段階とみなされ、かつ、病因によつて差のないことを明らかにしている。

Saul Rosenzweig はひとりの人間を「個性的事象界の独自の内的関係性」（the unique interrelatedness of the individual universe of events）というふうに定義しており、“人”を「個性的な事象界」または「独自の個性的世界」としての“Idioverse”ということばで説明しようとしている。すなわち“人”は「独自の世界を持った、個性的なまたとない存在」として理解されなければならないことを強調し、この「独自の個性的事象界の力動性」を解明しようとする立場を Idio-

dynamics と称し、この立場から人格理論の樹立をめざし、その第一段階として欲求不満の理論を展開したのである。この個体内の力動性を重視して、全体としての人格（personality as a whole）に接近しようとするれば、従来の研究のように、精神測定学的（psychometric）な方法による個体間

（inter-individual）の比較に依存するのでは不<sub>レ</sub>ふんであって、個体内（intra-individual）の精神力動的な関係に注目しなければならない。こうした人格の力動性を把握するための方法として、考案されている P-F Study は、欲求不満事態においてそれが最もよく示されることに着目している。

すなわち、P-F Study は、個々の欲求不満事態で、被験者の示すきわめて主観的な言語表現

（idiomatic language）つまり Idioverse を母集団にとり、これをできるだけ客観的、語義的に解釈（Semantic interpretation）し、（すなわち、個体的標準 individual norm への当てはめの段階）、かつ、これを量的に分析（すなわち、集団的標準 group norm への当てはめの段階）することによってその背景にひそむ個々人の独自の自我防衛のあり方を明らかにすることによって、被験者の「独自の個体的世界」に接近（すなわち、普遍的標準 universal norm への当てはめの段階）しようとするもので

ある。

### Rosenzweig P-F Study (日本版) について

このテストは24種の日常生活において普通だれでもが経験する欲求不満場面によって構成されている。絵は線画を用い、人物の表情や態度はことさらに省略してある。これは絵の印象で特別な反応を暗示誘発することをなるべく避けるためである。どの絵も左側の話しかけている人物が右側の人物になんらかの意味で不満を起こさせている場面になっている。テスト場面は大きくわけて次の2つになる。

- (1) 人為的, 非人為的な障害によって直接に自我が阻害されて欲求不満を引き起している16場面  
これらを自我阻害場面 (Ego-Blocking Situation) と名付けている。
- (2) だれか他の者から非難, 詰問されて超自我 (良心) が阻害されて欲求不満を招いた8場面で、  
これらを超自我阻害場面 (Superego-Blocking Situation) と名付けている。

この24場面全部の絵については、日本人の感覚にぴったりにするように (特に、服装や家具など)、また日本人の習慣に合わないものも原法の絵の効果を失わないように描きかえられている。なお、実施は、その被験者により適宜、集団実施と個別実施ができるようになっている。

テストの評点は、24の欲求不満場面における反応語の内容を、どんな方向に攻撃を向けているか、どんな型のものかという2つの観点から分類し記号表示するのである。すなわち、攻撃の方向には、

- (1) 外罰方向 (Extrapunitiveness) (E) (人とか物とか状況に攻撃が向けられているもの)
- (2) 内罰方向 (Intropunitiveness) (I) (自分自身に攻撃が向けられているもの)
- (3) 無罰方向 (Impunitiveness) (M) (欲求不満をうまくごまかしてしまうか、うわべをつくらって攻撃を避けてしまうもの)

の3つがあり、

反応の型には

- (1) 障害優位 (Obstacle-Dominance) (O-D) (欲求不満を引き起した障害を述べているもの)
- (2) 自己防禦型 (Ego-Defence) (E-D) (自我を強調しているもの)
- (3) 欲求固執型 (Need-Persistence) (N-P) (欲求不満の解決を強調しているもの)

の3つがある。これら合計6つの反応類型の組み合わせから2つの変型を含む総計11の評点因子ができる。

#### (表1)

被験者から得た反応語が、11の評点因子のどれに該当するかを決定して、それぞれ記号で記録用紙に整理するのである。この場合の評点の基本的態度は、反応語の動機的水準は考慮せず、できるだけ表にあらわれた水準 (overt level), すなわち、個々の個体の示す個性的なことばを客観的に語義的にのみ解釈することである。

記録の解釈は項目別解釈に終わらず、各項目からでてくる反応傾向を力動的に解釈して、個体内の精神力動的な関係 (psychodynamic relationships) に接近しようとするのである。次に、このテストの解釈にあたっての項目とその意味についてのごく概略を記述しておく。(詳細は手びきを参照されたい)

表1 評点因子とその分類記号

方向 \ 型	障害優位 (O-D)	自己防禦 (E-D)	要求固執 (N-P)
外罰 (E)	E'	<u>E</u>	e
内罰 (I)	I'	<u>I</u>	i
無罰 (M)	M'	M	m

1 G C R (Group Conformity Rating) ; 集団一致度とか集団適応度といい、日常生活でごく普通に起こりがちな欲求不満場面には、必ず常識的な適応のしかたがある。これと個々の被験者から得た反応語が一致するかどうかをその合致率と合致内容とから社会適応度をみようとするものである。

2 プロフィール欄 ; 各評点因子別の出現頻度と、攻撃方向・反応型の割合より被験者の因子の構造と反応傾向とを知る最も重要な欄で、各因子の相対的出現頻度により力動的に人格を把握しようとするもので、あくまで一義的にきめつけず、方向と型から相対的に理解することをねらっている。

3 超自我因子欄 ; 他から非難、詰問されて不満を起こした場合の反応である E 反応と I 反応との 2 つの超自我因子について集計し、社会性および精神発達をみようとするものである。

4 反応転移分析欄 ; 前半と後半との反応を対比して、「被験者自身の反応に対する反応」を明らかにすることにより、欲求不満耐性 (Frustration tolerance) の高低、情緒の安定度、攻撃の表明に際しての葛藤などを知るなど、解釈に際しての重要な内的意義をもつものである。

## Ⅱ 研究目的

Rosenzweig P - F Study により精神薄弱児の人格特徴を把握し、その変容傾向を究明する。

## Ⅲ 研究方法

### 1 研究仮説

上述の研究目的を達成するために、次の 3 つの仮説を設定する。

〔仮説一 1〕 P - F Study の児童用の適用範囲は 4 才～14 才であるが、精神薄弱児においても精神年齢 (M.A.) が 4 才程度以上のものであれば適用することは可能であろう。

〔仮説一 2〕 仮説 1 で、精神年齢 4 才以上の精神薄弱児にも P - F Study を適用することが可能であると判明すれば、従来の諸研究が示唆するように、精神薄弱児の人格特徴を、P - F Study によっても、正常児との差異として把握することができよう。

〔仮説一 3〕 特殊教育の主目標が社会適応性の育成であり、その目的にそって経営される特殊学級では入級した精神薄弱児の人格の歪みは変容するであろう。すなわち、特殊教育により精神薄弱児の社会適応性は伸び、よりよき人格への変容の傾向を示すであろう。

### 2 調査対象

新潟市内の公立小学校 2 か校の特殊学級の精神薄弱児童 17 名 (男子 8 名、女子 9 名) を調査対象とする。

なお、調査対象学級を単位としたために、精神薄弱児の範囲にはいない被験者も含んでいる。調査対象者は表 2、年齢分布は表 3 の通りである。



表2 調査対象一覧

項目	児童	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	平均
学 年		3	3	3	4	4	4	4	4	5	5	5	4	5	5	6	6	5	—
C. A.		8:0	8:5	8:7	9:4	9:9	9:9	9:10	10:3	10:4	10:5	10:5	10:6	10:6	11:1	11:6	12:1	12:7	10:1
M. A.		4:10	6:4	7:1	8:4	7:3	7:8	7:5	7:7	6:6	4:8	7:8	6:4	8:1	8:10	7:3	10:1	5:6	7:0
WISC	V.I.Q	64	84	76	86	78	82	74	74	57	57	91	57	95	73	66	84	43	73.0
	P.I.Q	66	72	92	99	76	81	81	80	84	46	65	73	65	88	69	86	58	75.3
	W.I.Q	60	75	82	91	74	79	75	74	68	45	75	60	77	80	63	84	43	70.8

表3 対象者の年齢分布

年齢	4才台	5	6	7	8	9	10	11	12
C A					3	4	6	2	2
M A	2	1	3	7	3		1		

### 3 P-F Study の手続と実施

#### 1) 手 続

- ① 各学校において，児童が慣れている教室で個別に実施
- ② 教示の与え方は Rosenzweig の通り
- ③ 研究目的に適合した条件の設定
  - a 精神薄弱児では，各欲求不満場面の理解ないし把握力に乏しいと考えて，暗示や誘導にならない程度に場面説明を具体的に述べる。
  - b たゞし，具体的説明においても，投影法の本質である場面のあいまいさを維持することによって，反応の自由度・分散度を高めるために，各欲求不満場面の人物の関係は明示しない。
  - c 教示の理解または調査への適応を照合するには調査用紙の練習場面を使用する。その際，回答法が理解できるように繰り返し練習を行なうが，それでも不じゅうぶんの場合は，各場面ごとに2～3回の説明を繰り返す。それでも反応しないときは無回答とみなす。
  - d 反応に要する時間的制約は加えない。
  - e 被験者が文字の読み書きが可能であっても，全員に対して，個別的に口問口答とする。
  - f 反応語の整理に当っては，Rosenzweig のように客観的な語義的解釈を行なうようにしたが，言語による表現力に乏しい精神薄弱児の反応語の心理学的意味（元型）を確かめるうえで，その内容についての説明を求めることもある。
  - g 調査で得られた反応語の評点は，2名の評点者が別個に評点し，特に評点が相互に食い違った場合には両方で検討し評点した。
  - h 次に，テスト実施可能と不可能との判断の基準は，24場面中17場面（約70%）以上に応じ得たか否かに依る。

以上の条件設定は，このP-F Studyの編著者の一人である一谷彊氏の研究にそうものである。



## 2) 実 施

上記の手續に基づき、P-F Study を次のとおり実施した。

(A 学級)

(B 学級)

第 I 回 昭和 41 年 6 月 24, 28 日 7 月 12 日

第 II 回 昭和 41 年 11 月 11 日 12 月 21 日

実施間隔 約 5 か月

## 4 研究手順

すでに設定された 3 つの研究仮説の検証は、おおむね次のような手順により行なう。

〔仮説-1〕の検証は、第 I 回目の調査結果について、対象者を精神年齢 (M.A.) 段階を設定して分類し、その年齢ごとの全場面理解度を有効反応率、誤認率から検討する。

〔仮説-2〕の検証については、仮説-1 と同様、第 1 回目の調査結果について、GCR, 各評点因子、各超自我因子、反応転移ごとに、対象者全体および別個に平均値と比較検討する。

〔仮説-3〕の検証については、第 1 回目、第 2 回目の調査結果について、GCR, 各評点因子、各超自我因子、反応転移ごとに相互比較するとともに、それぞれの結果と平均値との関係を検討する。また全体的傾向を対象者の平均値で比較することに含まれる危険性を避け、P-F Study のめざす独自の個性的世界に接近し、その変容の傾向を把握する意味で、対象者の中から 1 児童を抽出し、参考事例としてその変容の姿を把握する。

## IV 調査結果とその考察

### 1 〔仮説-1〕について

仮説 I は、Rosenzweig が指摘しているように、P-F Study の児童用の適用範囲が 4 才～14 才までであるとするならば、精神薄弱児であつても精神年齢 (M.A.) が 4 才以上であればそれを適用することが可能であることを明らかにしようとするものである。このためには、精神年齢 (M.A.) 3 才～5 才位の被験者を対象とすることが必要であるが、本研究の主目的である〔仮説-3〕の検証のための被験者を対象としたために、4 才未満の被験者を含めることができなかった。したがって、この項には、本研究を推進するための前提条件としての意味を与えることになる。すなわち、この項は、本研究の被験者への P-F Study 適用の可否を明らかにする。

表 4 個人別場面理解度

項目 \ 被験者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	計
M. A.	4	6	7	8	7	7	7	7	6	4	7	6	8	8	7	10	5	—
期待反応諸数	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	408
場面誤認数	1	—	—	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
有効反応率	96%	100	100	100	96	92	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	99.02

表5 M.A.による全場面の理解度

M.A.	4才	5	6	7	8	10
被験者数	2	1	3	7	3	1
期待反応語数	48	24	72	168	72	24
有効反応数	47	24	72	165	72	24
有効反応率	98%	100%	100%	98%	100%	100%
誤認数	1	—	—	1	—	—
無答数	—	—	—	2	—	—
無効反応率	2	—	—	2	—	—

(注) 期待反応語数とは全場面数(24場面)に被験者数を乗じたもの。

C.A.9才9か月, M.A.7才8か月である。このことから全被験者を精神年齢の観点から分類し、整理したのが表5である。表5によればM.A.4才とM.A.7才に無効反応が出現している。刺激欲求不満場面を了解し、それに反応することができた有効反応率をみると、いずれも調査の手續の項で設定した判定基準70%以上をこえている。このことは、精神薄弱児であつても精神年齢が4才以上となれば、刺激場面を了解し反応することが可能であることを示している。すなわち、精神年齢が4才以上である本研究の被験者に対するP-F Studyの適用は可能であることが明らかとなった。

したがって、本研究の対象者に関しては、一応〔仮説-1〕は採択できるものとする。

表6 場面別無効反応分布

場面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	計
無効反応数	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	4
有効反応率	94	100	88	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	94	100	100	100	100	100	100	100	100	99.02

このように、欲求不満場面の了解は比較的容易に行なわれたが、その質的側面には疑問が残ろう。しかし、それについては〔仮説-2〕において考察することとし、ここでは無効反応の出現した各場面について考察を試みる。なお、無効反応の出現した場面は表6のとおりである。

1) 場面1には被験者No.6が無効反応をしている。その内容は、実施手續で設定された条件にそって、暗示誘導にならない程度の説明を繰り返したうえでの無応答である。この刺激語「おかしは にさんにあげたから もう ひとつともありませんよ」は日常生活において遭遇したことのあることばであり、個体に要求活動を誘発したのであろうことは容易に察しられる。この被験者はこのほか場面3においても無応答であるが、他の22場面では有効反応をしている。このことから、最も子どもの生活場面に密着していて、欲求不満を容易に誘発しやすいと考えられる場面の理解が困難であったからとはいえないであろう。したがって、場面1は難解な刺激場面というよりも、むしろ、個人の新事態に対する適応力に関係するように考えられる。

2) 場面3には被験者No.1とNo.6が無効反応をしている。この場面の刺激語「じかんち ゆうに おしゃべりして のこされたが ほんとうは きみに しゃべるつもりは なかったんだ」は、欲求不満

場面が全体として理解しにくく（個別面接で実施して、特に説明を繰り返した場面であり、集団実施の場合は誤答率・無反応率は相当高いと推測される）特に精神年齢の低い精神薄弱児にこの場面を適用することはむずかしい。

3) 場面 16 には被験者 No. 5 が無効反応を示し、無応答である。この場面の刺激語「あなたのボールをとったりして このちいさいこは いけないわね」の理解も、場面 3 と同様理解困難である。

一谷氏は、精神薄弱児において誤認や無答の生じるのは、総じて、欲求不満をひき起こさせるエイジェント（frustration agent）をだれに認知するかによっている。というすなわち、場面 3 においてはフラストレーション・エイジェントを、しゃべりかけてきた子どもと認知するか、あるいは、残した教師として認知するかに依存するし、場面 16 においても、それがボールを取った子どもとして認知するか、そばにいる母親らしい人をそれとして認知するかに依存する。同様なことは、場面 7, 8, 13, 19 などについてもいえる。

このような場面は精神薄弱児のみならず、正常児にとっても理解困難なところであろう。まして、精神薄弱児はその知的特性から与えられた刺激場面の諸要素（人間関係および刺激語など）の間の関係を理解すること、および、この関係を理解したうえで問題を解決するためになすべきことを発見すること、すなわち、関係の把握、解決の発見とも劣弱であり、知覚体制の再構成といった作用（洞察）を営む能力が劣ることからして、場面理解の困難性が予想される。さらに、精神薄弱児にみられる要求水準の特性の諸研究から、自分の能力、現実目標と理想目標の区別、目標遂行への意欲・努力という点で種々の問題が考えられ、加えて、精神薄弱児では、生活経験の貧困やそれに起因する視野の狭小、興味の偏重、言語的表現力の乏しさもまたその原因と見なされる。

このように精神薄弱児に対しての P-F Study の適用には種々の問題が考えられ、じゅうぶんに自己の投影が行なわれ得ない場面のあることは否定できないが、結果的には無効反応はごく限られた場面に少数しか出現しなかったことから、〔仮説-1〕は、一応、採択することができると考える。

## 2 〔仮説-2〕について

前項〔仮説-1〕の検証の結果、精神薄弱児に対しても、全面的とはいえないが、P-F Study の適用が可能であることが立証された。しかし、その場面理解の質的な面、すなわち、欲求不満場面に対する不満反応の表現方法には、正常児と比較して、大きな歪みがみられるのではないであろうか。この点を究明することが〔仮説-2〕の検証である。なお、正常児群の標準としては、この P-F Study 児童用がその標準化にあたり知能指数（IQ）110～80 の児童生徒を対象としていることから児童用標準を適用することにする。

P-F Study 実施（第1回）の結果をスコアリングし、整理したのが表 7 である。この結果を児童標準と比較するために、各項目ごとに、各個人別にその年齢標準と対応させて、群全体としての有意差検定を行ない、さらに精神薄弱児群の一般的な人格特徴を把握しようとしたのが表 8 である。

### 1) 児童標準との比較（group normへの適用）

P-F Study の結果は集団標準（Group norm）に照らしての項目解釈に終わらず、各項目からでてくる傾向を互いにかみ合わせて力動的に解釈し、真の生きた人間像を把握しなければならないことは前

表7 P - F Study 個人別結果(1)

被験者	GCR (%)	プロフィール欄 (%)						超自我因子欄 (%)						反応転移分析欄				
		攻撃方向			反応型			E	I	E+I	E-E	I-I	M+I	1	2	3	4	5
		E	I	M	O-D	E-D	N-P											
1	54	30	43	26	4	37	59	9	-	9	4	20	26			-0.50 m	-0.55 M	
2	50	42	38	21	8	67	25	4	17	21	29	13	42					N-P <sup>+0.67</sup>
3	38	46	27	27	27	35	38	4	-	4	13	8	29	E <sup>+0.75</sup>	e <sup>+0.33</sup>	E <sup>+0.55</sup> -0.85 M	-0.45 E-D	
4	71	35	29	35	13	54	29	4	-	4	10	29	35		e <sup>+0.60</sup>	E <sup>+0.41</sup> -0.53 M		
5	77	41	30	28	17	50	33	4	-	4	15	22	13	E <sup>+0.33</sup>		I <sup>+0.43</sup> -0.38 M		
6	50	30	41	30	18	59	23	5	-	5	9	27	30	-0.67 I M <sup>+0.50</sup>		E <sup>+0.38</sup> -0.56 I	-1 O-D N-P <sup>+1</sup>	
7	38	48	33	19	29	38	33	-	-	-	17	13	19			-0.50 e	-0.55 M	
8	54	46	21	33	13	54	33	13	-	13	13	17	33	E <sup>+0.33</sup> -0.50 I	e <sup>+0.60</sup>	E <sup>+0.45</sup> -0.50 I		
9	21	81	8	10	21	50	29	-	-	-	40	8	10	E <sup>+0.75</sup>	e <sup>+0.33</sup>	E <sup>+0.55</sup> -0.85 M	-0.45 O-D	
10	46	56	31	13	31	40	29	-	-	-	15	25	13			I <sup>+0.37</sup>		
11	33	29	33	38	17	29	54	-	4	4	4	13	42	-0.50 M	-1 I	i <sup>+1</sup>		-0.50 O-D N-P <sup>+0.4</sup>
12	71	42	31	27	17	56	27	-	-	-	17	27	27	E <sup>+0.75</sup>				-1 O-D ED <sup>+0.33</sup>
13	38	54	21	25	8	52	40	-	8	8	23	8	33	-0.64 E	e <sup>+0.85</sup>	-0.33 M	-0.35 E-D N-P <sup>+0.41</sup>	
14	54	42	33	25	8	46	46	8	4	13	8	21	29	I <sup>+0.33</sup>	e <sup>+0.33</sup>	-0.33 M		
15	75	35	29	35	13	46	42	4	8	13	17	13	44	E <sup>+0.60</sup>	-0.33 m	-0.41 M		
16	75	31	31	40	17	56	27	8	2	10	10	23	40	E <sup>+0.33</sup>		E <sup>+0.33</sup> -0.33 M		
17	42	61	25	15	42	21	38	-	-	-	8	13	15					
平均	50.0	44.4	29.9	25.7	17.4	46.9	35.7	3.4	2.6	6.3	14.7	17.3	28.0					

表8 児童標準範囲 (S.D.) と調査結果との比較  
および標準とのずれの内容比較

比較 項目 (%)	標準との比較			範囲外内容比較			
	範囲内	範囲外	x <sup>2</sup> 値	+	-	サインテスト結果	x <sup>2</sup> 値
G C R	5	12	2.89	5	7	0.774	0.33
E	9	8	0.05	2	6	0.290	2.00
I	12	5	2.89	4	1	0.376	1.80
M	12	5	2.89	2	3	1.000	0.20
O - D	10	7	0.52	3	4	1.000	0.14
E - D	10	7	0.52	1	6	0.124	3.57
N - P	12	5	2.89	5	0	0.062	✱5.00
E	10	7	0.52	1	6	0.124	3.57
I	5	12	2.89	2	10	✱0.038	✱5.33
E + I	7	10	0.52	2	8	0.110	3.60
E - E	13	4	✱4.64	2	2	-	0.00
I - I	9	8	0.05	8	0	✱0.008	✱8.00
M + I	13	4	✱4.64	0	4	-	✱4.00

$n = 2 - 1 = 1$   $P = 0.05 \cdots 3.841$   $P = 0.01 \cdots 6.635$

に述べたところであるが、ここでは、精神薄弱児群という集団の一般的傾向を把握することから、そのような解釈の段階までには至らず、総括的な検討にとどめる。

表 8 の児童標準と精神薄弱児群との比較（カイ自乗検定）の結果、5%水準で（E - E）および（M + I）の超自我因子項目に有意差が認められ、他の項目には両群間の有意差は認められない。この両項目の有意差の存在の意味するところは、両項目ともその示す傾向は児童標準の範囲内にあつて、精神薄弱児群の特徴的傾向ではないということである。またこれと同じ傾向を示すものとして I、M と反応型（O - D, E - D, N - P）がある。そして、有意差が認められないが、GCR をはじめとする他の項目にむしろ精神薄弱児の人格特性が存在することを暗示している。なかでも、児童標準外が比較的多い GCR, E, I, E + I, I - I の項目は明瞭には指摘することはできないが、普通児童の反応とは違った傾向を推測することができる。これらのことについては、児童標準外の内容を検討することによって、少しでも明らかにしたい。

## 2) 精神薄弱児の一般的人格特徴の考察

精神薄弱児群の結果に、児童標準範囲に含まれない頻度が多いという有意性が認められないことからその人格特徴の把握は困難であるが、今後の研究の手がかりを得る意味で、以下項目別に順次考察を加える。

### i GCR（社会適応度）

GCR は、欲求不満場面に遭遇した際の歪力（stress）下において、通常ごく普通に一般の児童が示す反応と同じ反応を被験者がなす能力をもっているかどうかをみる指標とされている。この P - F Study 児童用においては年齢発達を考慮し、各年齢層に共通に多数反応として出現し、かつ年齢を追うに従って、増加の傾向を示すものを GCR 標点として、あらかじめ 12 場面に設定されているが、被験者から得た反応語の評点が、これとどの程度合致しているか、さらにその合致のしかたにどのような傾向があるかを検討することによって、適応のしかたの傾向を知ることができるのである。したがって尺度としての GCR は一方に集団との一致度という性質と、他方にこの尺度構成項目自体が、個々に備えている不満反応特質との二要因を含んでいるわけで、GCR についての考察は、被験者の GCR % の高さだけを問題にするだけでなく、いかなる場面で設定された GCR 評点と合致を示し、いかなる場面でそこ（齟齬）を示すかというように内容についても検討しなければならない。

#### a GCR % の高さについて

児童標準との有意性の検定では、精神薄弱児の GCR % は 5%水準で有意差がなく、10%水準で児童標準範囲外が多く検出されることが認められる。このように危険率の高い水準で漸く有意差が認められることは、従来の、精神薄弱児の社会適応性は全般的に低いとする諸研究と矛盾するようであるが、これについては、調査対象者の知能程度（表 2）からいって、精神薄弱児に該当しない児童が含まれていること、あるいは約半数の児童はすでに特殊学級で教育をうけているなど、諸種の要因を除去できないためと思う。しかし、この研究の対象者の GCR % の傾向は、その個々の知能指数の傾向とはほとんど相関がない（ $r_s = 0.0002$ ）という結果がでている。このことはドル（E, A, Do11）が精神薄弱者の施設で多くのものをみているうちに、同じ知能程度のものでも、具体的な生活能力の高いものと低いものがあることを見出し、比較的純粋な知的能力としての知能とは別に具体的な社会生活を処

理する能力を考えたことにつらなる。このように表8からはその有意性は認められないのであるが、GCR評点の合致内容を検討する(次項)ためにまとめた表9によれば、被験者全体のGCR率は、平均で50.0%であつて、この対象群のGCR%標準は、平均年齢の10才1か月(表2)を基準にすると、58.3%であるからかなり低いといえる。ちなみに、児童標準によれば、このGCR率は5~6才程度に相当する。また、各個人別の検討において、対象群の中で児童標準範囲に属する被験者(5名)の平均は53.3%で児童標準範囲内とはいえやはり低く、児童標準の7~8才程度に相当する。また、児童標準範囲をはずれる精神薄弱児のうちGCR%の高すぎる群(5名超GCR群とする)と低すぎる群(7名:低GCR群とする)とに関する $\chi^2$ -検定の結果超GCR群は $\chi^2=0.067$ で児童標準と有意性はなく、低GCR群は $\chi^2=5.762$ で2%水準で有意性が認められる。このことは、精神薄弱児のGCR率は全体的に低く、(しかし表8でわかるように超GCR群と低GCR群との間には、統計的に有意差がないことが確かめられている)たといGCR%が高すぎる精神薄弱児であつてもその反応内容に問題の潜在を示していると考えられる。

#### b GCR評点の合致内容について

前項でのGCR%の高さについて検討した結果、精神薄弱児特有の傾向を見出すことはできず、ただ、全体的にはかなり低いことが推察されるが、次に、すでに設定されている12のGCR評点との合致内容を検討することによりその傾向の把握を試みる。(表9)

##### a) 全体的傾向

対象群全体のGCR評点合致内容を示す表9で、特に著しい傾向としてI%が47.0%で、児童標準

表9 GCRの合致内容(平均)

( )内は群内別割合

項目	児童標準		精神薄弱児の社会適応度群			
	評点数	評点割合	0(5人)	+(5人)	-(7人)	全体
E	2	16.7%	1.2 (18.7%)	0.6 (7.4%)	0.5 (11.9%)	0.7 (12.3%)
I	4.5	37.5%	2.9 (45.3%)	4.1 (50.6%)	1.9 (44.0%)	2.8 (47.0%)
M	2	16.7%	※ 0.4 (6.3%)	1.4 (17.3%)	0.5 (11.9%)	0.7 (12.3%)
i	0.5	4.2%	0.4 (6.3%)	0.2 (2.5%)	0.3 (6.8%)	0.3 (4.9%)
m	3	25.0%	1.5 (23.4%)	1.8 (22.2%)	1.1 (25.4%)	1.4 (23.5%)
計	12	100.1%	6.4	8.1	※※ 4.2	6.0
GCR%		58.3%	53.3%	67.5%	※※ 35.1%	50.0%
超自我場面数		3.8 (31.6%)	4.1 (34.2%)	4.7 (39.2%)	2.4 (19.6%)	3.6 (29.7%)
GCR%に対する割合		54.2%	64.2%	58.1%	55.8%	59.4%

(注) ※ 5%水準 ※※ 2%水準



の37.5%と比べて高いことが指摘できる。それと相対的にE%, M%が低く, i%, m%は変わらない。これらのことは、精神薄弱児群の全体的傾向として、欲求不満を起こした原因をすべて自己側に求め、自責や自己非難の気持ちが過剰なために社会適応が困難となっていることを意味している。このような傾向は、それがどのような要因によって形成されたものであるかについての研究は少ないが、I反応が、自分は人を非難したり、攻撃したりはしないかといった恐れから、外に向けられるべき攻撃を放出あるいは表出しないで、かえってそれを自分に向けることによって自己を守ろうとする防衛機制を意味することから、精神薄弱児においては種々の成因が存在し、環境との相互作用で不当な圧迫が発達過程に加わることによって、すなわち具体的には、子どもが親の期待通りにのびないとする親のフラストレーションからくる子どもへの拒絶、罰などに対する子どもの不安、その不安を解消するために非難・攻撃することによって他人に傷をつけはしないかなどの恐れから、このようなI反応が多くあらわれるものと考えられる。全般的にかなり低いGCR%を示し、しかも、そのうちで超自我阻害場面での合致は50.0%中29.7%で標準率31.6%よりも低率であるが統計的には有意差はない。しかし、その内容はE反応が少なくI反応が多いことから社会適応に必要な程度の自我の強調が弱く、自己非難の傾向が強いことがうかがわれる。

#### b) 群別傾向

ア 標準GCR群は、GCR%が児童標準範囲内にあるとはいえ、低い方にかたよっているといえる。また、この群の大きな特徴としてM反応の合致率の低いことが指摘される。M反応の合致率標準が16.7%であるのに対し、この群の平均は6.3%であり、有意性の検定の結果5%水準で有意差が検出された。このことは自己偽瞞を伴った抑圧の機制で自我を防衛しようとする態度がなく、欲求不満反応を素直に表出する傾向を意味しているようである。それに、比較的にi反応の多いことから、問題の解決をはかるために自分自ら努力をする積極的傾向のあることもうかがえる。GCR%=53.3%中34.2%が超自我場面での合致であり、適応の程度は問題はないが、その内容はI、E反応が多くM反応が少ないことから、欲求不満場面において、攻撃を外に向けるか内に向けるかの二者択一の態度をとり、社会成熟度が低い。

イ 超GCR群は、児童標準58.3%に対し67.5%と高い率を示し、その性格特徴として事無かれ主義的な態度が予想される。その合致内容をみるとI反応が非常に高率を占め、反対にE反応が目立って少なくi反応も少ない。また、合致率67.5%の58.1%を占める39.2%が、超自我阻害場面である点他人からの非難に対しても適当な反応が可能のように見られるが、E反応が少なく、I反応が多いことから、こゝでも内罰的傾向の強さが指摘されよう。さらに、このことを裏付けるものとして、i反応の少ないこととM反応が多いこと、すなわち問題解決意欲の低調さ消極的態度と気が弱くて自分の気持ちを抑圧する傾向があることをとりあげることができる。このように超GCR群は社会適応度は高いけれども、その内容においていろいろな問題が内在し、むしろ、不適応傾向が強いといえる。

ウ 低GCR群は、児童標準58.3%に対し35.1%と低く、統計的にも2%水準で有意である。GCR評点との合致は12場面中平均で4.2場面である。そのうち超自我場面が2.4でその割合は、標準が54.2%であるのに対し、55.8%であって問題はないのであるが、全般的にGCR%が低すぎ、欲求不満に際しての反応は不適応状態を示すであろう。その中でも、他の群と同様I反応が高率を占めて



いること、i 反応が多いことから自罰的な傾向が強いために社会適応は困難であるが、それなりに自己更新のための努力といった行動がうかがわれ、超 G C R 群とは対照的である。

このように精神薄弱児の G C R についてみるとその高いもの、適度なもの、低いものの割合がほぼ同じ程度であるが、共通していることは、各群の G C R 内の超自我場面合致率は適度であるが、その内容をみると I 反応率が高いということで、いずれの群も社会適応のしかたに問題があり、「問題解決の意欲なく、欲求不満の原因は何事も自分にあると考えて自己を非難し規則、習慣に従うという違法性に乏しく逃避的な生活態度を示し、社会性の発達が遅れている」ということである。

表 10 プロフィール欄 (平均)

(注) 標準は平均年齢を基準とする。

方向	型	(O-D)	(E-D)	(N-P)	方向別割合
E	対象群	1.8	4.4	4.3	44.4 %
	標準	1.9	6.3	3.5	48.7 %
I	対象群	0.3	4.8	2.0	29.9 %
	標準	1.1	4.1	0.9	25.3 %
M	対象群	2.0	1.9	2.1	25.7 %
	標準	1.6	2.3	2.4	26.1 %
型割合	対象群	17.4 %	46.9 %	35.7 %	100.0 %
	標準	19.4 %	52.3 %	28.4 %	100.0 %

## ii プロフィール欄の傾向

評点因子別に集計し攻撃の方向別、反応の型別にそれぞれ割合を計算して、その反応がどんな特徴をもっているかを表示するのがこのプロフィール欄である。

対象群の調査結果と児童標準との比較は表 8 のとおりで、プロフィール欄において各評点因子とも有意差は認められず、全般的には標準範囲内にあるが、その中で、E % および E-D % が低く N-P % が高い傾向がうかがえるようである。

表 11 プロフィール欄 攻撃方向傾向 (%)

項目	方向因子	外罰方向			内罰方向			無罰方向			計
		E'	E	e	I'	I	i	M'	M	m	
対象群	対象群	17.1	42.0	40.9	4.6	67.5	27.9	32.9	31.4	35.7	300.0
	標準	16.3	48.8	34.9	18.1	67.2	14.7	25.4	36.6	38.0	300.0
方向割合	対象群	44.4			29.9			25.7			100.0
	標準	48.7			25.3			26.1			100.0

表 10 は、各評点因子別に対象群の個人平均を、対象群の平均年齢標準と比較するために作成するものであり、表 11、表 12 は、さらに表 10 の内容を検討する意味をもつものである。

表 12 プロフィール欄 反応型傾向 (%)

項目	型因子	障害優位型 (O-D)			自己防禦型 (E-D)			要求固執型 (N-P)			計
		E'	I'	M'	E	I	M	e	i	m	
対象群	対象群	43.6	7.9	48.5	40.0	43.1	16.9	51.6	23.7	24.7	300.0
	標準	41.3	23.9	34.8	49.6	32.3	18.1	51.5	13.2	35.3	300.0
型割合	対象群	17.5			47.0			35.5			100.0
	標準	19.4			52.3			28.4			100.0

## a 方向および型の比較

攻撃方向をみると、E % および M % が標準より低く、I % が高くなっている。E % の低いわけは E 反応が少ないのに由来し、M % では M 反応が少ないためであることが表 11 からわかる。また I % が高いのは i 反応の多いことに起因

していると考えられる。他方、反応型をみると O-D % および E-D % が低く、N-P % が高い傾向を示している。さらに O-D % の低いのは I' 反応が少なく、E-D % が低いのは E 反応の少ないためであり、N-P % の高いのは e 反応および i 反応の多いためである。

## b 全体的傾向

対象群平均のプロフィール欄を標準と比較してみると、精神薄弱児は欲求不満に対する攻撃の方向が自分自身であり、自己非難傾向が強く（I 反応）、その解決をはかるために献身的償いや罪ほろぼしの意味のあと始末をしたり（i 反応）、あるいは他の人に向かって依存したり、救助を求めたり、ある時は庇護を求める（e 反応）などの傾向があり、忍耐するとか規則習慣に従うなどという解決法はとらない（m 反応）ようである。このことは反応の型からいえることであって、精神薄弱児はピアソン

（Pearson, G. H. J.）が指摘しているように（かれは「精神薄弱児は自我と超自我の構造には欠陥があり、とくに自我の構造の障害——自我の未分化——は抑圧とか禁止の機能を正常に果たさず、攻撃的衝動がおさえられず、社会的自律性が発展できにくい」という）、自我の率直な表明を抑圧することなく（O-D 反応）、衝動的に欲求不満の解決を他人に求めたり、あるいは罪償感に根ざす贖罪という形をとり強い劣等感を抱いている（N-P 反応）といえる。

とくに欲求不満の原因が自分自身にありとし、その罪からのがれるために心の中に強い救援の欲求、ないしは甘えたい欲求をもっている反面、環境からくる諸条件（対人関係のまずさ、愛情生活や経済生活に恵まれないなどが、諸研究の結果報告されているとともに、この調査の対象者のほとんどが、このような悪条件の中で生活している。）から、自分であと始末をすることを習慣づけられているようである。

### iii 超自我因子欄の傾向

他から非難、詰問、叱責をうけて不満を起こした場合、自罰を避けるためにこれを攻撃的に否認したり（E）、一応その罪を認めるが、避け得なかった理由をあげて、本質的にはその罪を否認したり（I）するような反応が超自我因子である。超自我は、自己の行動に対して「正しい」とか「間違い」とかの観点から親やその他の関係者から批判され、それが最初は他からの批判であったものが、いつしか自我のうちに摂取されて自分のものとなり、あたかも自分自身の気持ちから出た批判と感ずるようになった

表 13 超自我因子の比較（％）

	<u>E</u>	<u>I</u>	<u>E+I</u>	<u>E-E</u>	<u>I-I</u>	<u>M+I</u>
対象群	3.4	2.5	6.3	14.7	17.3	28.0
標準	6.3	7.1	13.4	19.7	9.3	33.2

もの、すなわち、しつけとか社会的拘束や道徳的規範によって自我の行動を監視するもの（「良心」もその一種である）である。したがって、このような超自我が適度に形成されているということは、その

社会に適応してゆくうえで必要なことであり、その傾向を知ること（超自我が自我に対して敵意をいだいたり、すくなくとも批判的な態度をとる。すなわち、「超自我が自我と関係し、自我に影響を与え、自我を変化させてくるとき、その自我の変化のしかたから超自我を知ることができる」とアンナ・フロイド Anna Freud はいう）によって、社会性あるいは精神発達の状態を把握することができるのである。

表 8 をみると、E-E 因子、M+I 因子は標準範囲内にあるものが多いと統計的にいえる。そして、この超自我因子欄の大きな特徴ともいえる I 因子が、少ない方に大きくかたよっている傾向がうかがえる。これと相対的に I-I 因子が高率を占めていることがはっきりみられる。この結果からさらに、一般の傾向を把握する目的で作成したのが表 13 である。

表 13 における各超自我因子は共通した傾向を示していることがわかる。以下、超自我因子欄の各項目について、その傾向を考察する。

E % ; 人から非難されたり、叱責、詰問を受けた際に、甘んじてそれを受けずに適度に攻撃的に否認することは、やはり、社会に適応するためには大切なことであるが、対象群はその攻撃的否認の反応が少なく、受け身的に負わされた罪が不当であっても積極的に攻撃し得ない傾向を示している。

I % ; 一応は罪を認めながらも、いいわけをして本質的には、非難や叱責を受け入れないということも、ある程度は社会に適応するためにも必要なことであるが、対象群ではそのような自己弁護反応ができず、きわめて容易に自責の念をいだく傾向がある。

E + I % ; 人から非難・詰問を受けた際に、それを攻撃的に否認したりいいわけしたりすることは、自我の確立度、すなわち、精神発達、社会性の発達と密接な関係をもつと考えられているが、対象群はこの項においても低い出現率を示し、自我を主張し、自分を積極的に守ることができる程の精神的発達および社会的発達がみられない。

E - E % ; 相手から自己の非を指摘されて、非難ないしがめを受けたときに、それを否定することによつて、自己の立場を弁解しようとする (E 反応) のではなく、いわば、素朴な攻撃傾向の指標がこの因子であつて、対象群はこの反応が高率であることから、その攻撃性は幼稚であり精神発達の未熟さがうかがわれる。

I - I % ; これは純粹の自責、自己非難と関係するもので、対象群が著しく高い率を示していることから、この気持ちが過剰であることがわかる。

M + I % ; Mは欲求不満場面をうまくごまかすことにより、他をも弁護する寛容な精神をもち、他方 I は自己弁護をする傾向の指標であつて、この割合は4才から順次年齢を追うに従つて増加の傾向をたどるとされている。したがつて、対象群のこの反応因子が標準より低率であることから、社会性あるいは精神発達が遅れていることがわかる。

このように、対象群の超自我因子欄にみられる傾向は、乳幼児期からの親に代表される社会的、文化的な教育やしつけの内在化したものを象徴する超自我の発達が全般的に、たいへん遅れているということである。これは、精神薄弱児の知能が恒久的に遅滞しているため、心理的には概念形成・記憶・推理判断等、抽象的機能の低下あるいは高次の思考の働きが劣弱ということになり、それに伴つて、行動的に同じことの繰り返しからくる新しい環境への適応の困難性に関係しているものと考えられる。

表 14 反応転移出現率 (%)

反応転移の型	出現率	ローゼンツアイク
Eから遠ざかるもの	41.1	21
Iに向うもの	17.6	11
eから遠ざかるもの	35.3	—
Total Eから遠ざかるもの	35.3	22
Total Iから遠ざかるもの	11.8	11
Total Iに向うもの	11.8	—
Total Mに向うもの	64.8	13
O-D反応に向うもの	23.5	36
E-D反応に向うもの	17.6	—
N-P反応から遠ざかるもの	23.5	34

#### iv 反応転移分析欄の傾向

この欄は、テスト前半の反応の流れと、テスト後半の反応の流れが変化していないかを検討することにより、①情緒の安定・不安定、②攻撃の表明に際しての葛藤、③欲求不満耐性の高低を推測することができることから、一つの社会化道程の指標とすることができる。

表14は、個々の被験者の反応転移をまとめて出現率を算出したものである。なお、参考までにローゼンツアイク<sup>3)</sup>・ミルモ-の研究結果と比較する。

a) この表によると、Eから遠ざかるものや、Total Eから遠ざかり、I、Total IおよびTotal Mに向うものが多いことから

「被験者自身のテスト前半における反応に対する反応 (Reaction to his own reactions)」(後悔など) が強く、反応の不安定性、攻撃の表明に対する葛藤など、欲求不満場面に遭遇した際にいかに対処すべきかということについて、まだ安定した確固たる反応のしかたができていないという情緒不安定性がはっきり示されている。また、この転移が年齢の発達に伴い、露骨な敵意を抑制するという社会化の過程を表わすのであるが、その出現率が高いことから、無理な感情の抑圧、禁止、拒否の傾向がみられる。

b) e から遠ざかるものの出現率が高いが、これとあわせて Total M に向うものも標準よりはるかに高率を示していることから、被験者の心の中では「助力を求めたい、依存したい」といった庇護、救援、依存の欲求が強いことが推察できるが、家庭構造とか対人関係などで、その気持ちの表明に強いためらいを感じているものと考えられる。このことは、e から遠ざかるものが低年齢層に限られており、また、愛情生活あるいは経済生活に恵まれないものに多くあらわれる傾向があることから指摘できると考える。

c) 攻撃の型における反応転移をみると、テスト前半の N-P 反応から後半 O-D 反応、あるいは E-D 反応に向う傾向がある。しかし、個々にみると O-D 反応から遠ざかることは制止機制をあらわし N-P 反応が要求固執の程度をあらわすことから、「被験者自身の強い要求固執反応傾向に対する反省」が少なく、要求を制止することなく、E-D 反応に向うものが多いことと合わせて、自我の率直な表現による要求固執の傾向が強いことがわかる。

主として以上のような傾向を示す反応転移が平均 3.1 個あらわれている。そして、特に c) でふれたような傾向から欲求不満耐性が低く、精神発達、社会性発達の遅れが目立つといえる。

これまで〔仮説-2〕を検討するために、P-F Study による精神薄弱児の人格特徴の把握を試みたのであるが、全体的な統計処理によってはその特徴を明瞭にすることはできなかった。しかし、各評価因子別考察を行なった結果では、各項目ごとにその傾向を把握することができ、さらに、そこで把握された傾向は、その項目のみならず多項目間に共通していえることである。すなわち、P-F Study で把握された人格特徴傾向は、欲求不満の原因はすべて自己にあると考え、自責、自己批難の気持ちが過剰なために社会適応度が低くなっており、愛情生活や経済生活に恵まれず、その解決を他人に依存しようとする要求固執傾向が強く、超自我の発達が遅れているなど、社会性の発達、精神発達が遅滞しているとともに、情緒不安定で劣等感が強く、欲求不満耐性が低いといえる。したがって、〔仮説-2〕はほぼ採択し得るものと考ええる。

### 3 〔仮説-3〕について

〔仮説-3〕の検証は、〔仮説-2〕について把握された精神薄弱児の人格特徴が、特殊学級における教育的環境条件の変化によつて、社会適応性は伸び、よりよき人格への変容の傾向を明らかにすることによつてなされる。

P-F Study 第 1 回実施の結果は表 7 のとおりであるが、その後約 5 か月経過して実施した結果をまとめたものが表 15 である。表 16 は表 15 から作成されたものであって、これらをそれぞれ標準と比較することによつて全体的傾向を把握する。さらに、その変化の傾向を明らかにするための操作として

有意性の検定を行なったものが表17である。

表 1 5 P - F Study 個人別結果 (2)

被験者	GCR (%)	プロフィール欄 (%)						超自我因子欄 (%)						反応転移分析欄				
		攻撃方向			反応型			E	I	E+I	E-E	I-I	M+I	1	2	3	4	5
		E	I	M	O-D	E-D	N-P											
1	42	40	40	21	4	54	42	13	-	13	19	19	21	-	-0.33E	i +1	-0.47E I +0.58	N-P +0.40
2	71	46	17	38	13	54	33	4	8	13	25	-	46	-	E +0.57 -0.50M	e +0.75	E +0.64 -0.50I -0.50M	N-P +0.38
3	46	29	29	42	17	56	27	-	13	13	19	8	54	-	E +1		E +1 -0.40I -0.40M	-1O-D
4	33	48	33	19	4	61	35	4	4	8	25	23	23	-	-	e +1	-0.56M	N-P +0.65
5	63	33	46	21	4	71	25	4	-	4	17	33	21	-	-	-	-	-
6	63	17	38	46	8	75	17	-	-	-	4	33	46	-	-	-	E +0.50	-
7	58	44	25	31	13	33	54	8	-	8	13	8	31	-	E +0.50	-	E +0.36 -0.60M	-
8	63	25	38	38	17	67	17	4	-	4	13	29	38	-	E +0.50	-	E +0.57 -0.33M	N-P +0.50
9	50	74	20	7	9	67	24	7	7	15	41	11	15	-	-	-	-	-
10	54	46	29	25	13	54	33	4	-	4	17	25	25	-	-	-	M +0.33	-
11	29	38	46	17	8	35	56	4	4	8	10	17	21	-	-	i +0.60	-	-
12	63	50	25	25	8	46	46	4	-	4	17	17	25	-	-	e +0.43	E +0.33 -0.33M	-
13	29	63	29	8	10	46	44	-	6	6	25	15	15	-	-	-	-	-
14	71	42	33	25	8	58	33	4	17	21	13	13	42	-	E +0.50	e +0.67	E +0.60 -1M	-
15	75	31	44	25	13	48	40	4	4	8	-	27	29	-	-	-	E +0.33 -0.07M	-
16	46	25	25	50	8	52	40	8	4	13	2	8	54	-	-	-	E +0.33 -0.33I	-
17	42	79	15	6	50	31	19	-	-	-	19	13	6	E +0.39	-	-	-	O-D +0.41 -0.33E -0.33N-P
平均	52.8	42.7	31.1	26.2	12.2	53.4	34.4	4.0	4.0	7.9	16.3	17.5	30.2					

表 1 6 全体平均による比較

方向	型	(O-D)	(E-D)	(N-P)	方向別%
E	対象群①	1.8	4.4	4.3	44.4
	②	0.8	4.9	4.6	42.7
	標準	1.9	6.3	3.5	48.7
I	対象群①	0.3	4.8	2.0	29.9
	②	0.8	5.1	1.5	31.1
	標準	1.1	4.1	0.9	25.3
M	対象群①	2.0	1.9	2.1	25.7
	②	1.3	2.8	2.1	26.2
	標準	1.6	2.3	2.4	26.1
型別%	対象群①	17.5	47.0	35.5	100.0
	②	12.2	53.4	34.4	
	標準	19.4	52.3	28.4	

その最終的解決はe 反応, すなわち, 依存, 救援, 助力の要請の傾向の増大である。また, 前回高率をみ

1) GCR の変化について

全体の平均を比較すると 50.0 % → 52.8 % と上昇しており, 社会適応度が伸びているが, 標準に達しない。また, 表17 をみるとやはり望ましい方向への変化がみられる。すなわち, それは過度および低すぎるGCR%を示したものが減少し, 標準範囲に含まれるものが増加していることからいえるのである。

2) プロフィール欄の変化について

反応方向における変化の傾向としては, E%の減少, I%の増加, M%の標準値接近である。E%の減少はE'の減少に起因し, それは欲求不満事態において単なる失望に終始している状態から逃がれたいという欲求の現われであり



た I ⅔は、さらに過剰となり内罰傾向をました (I の増加) が、反面それによる罪償感は和らぎ (i の減少) , 欲求不満をあまりにも卒直に不平不満として表情・態度に表わす傾向が少なくなり (I' の増加) 欲求不満耐性が強化されてきたことがわかる。M ⅔においても、その内容をみると失望や不満を抑圧する傾向が標準に接近し「だれにも罪はない。ただ不可避の事態であっただけだ」とする寛容の精神が増し、したがって、社会成熟度が発達してきたといえる (M の増加)。

表 1 7 P - F Study 実施結果と比較 (注) ※ 5 ⅔水準 ※※ 1 ⅔水準

比較項目	標準と第 1 回							標準と第 2 回							第 1 回と第 2 回						
	+	0	-	0:±	0:+	0:-	+: -	+	0	-	0:±	0:+	0:-	+: -	+	0	-	0:±	0:+	0:-	+: -
GCR ⅔	5	5	7					3	8	6					8	2	7	※※	※	※	
E ⅔	2	9	6		※			3	8	6					7	1	9	※※	※	※	
I ⅔	4	12	1		※	※※		7	9	1			※	※	8	1	8	※※	※	※	
M ⅔	2	12	3		※	※		5	9	3					7	1	9	※※	※	※	
O - D ⅔	3	10	4					1	6	10				※※	4	3	10	※※			
E - D ⅔	1	10	6		※※			4	10	3					11	0	6	※※	※※	※	
N - P ⅔	5	12	0			※※	※	7	8	2					8	0	9	※※	※※	※※	
E ⅔	1	10	6		※※			1	13	3	※※	※※	※		6	7	4				
I ⅔	2	5	10				※	3	7	7					5	9	3				
E + I ⅔	2	7	8					2	10	5		※			10	2	5	※※	※		
E - E ⅔	2	13	2	※※	※※	※※		1	13	3	※※	※※	※		10	2	5	※※	※		
I - I ⅔	8	9	0		※※	※※	※※	6	10	1			※※		7	3	7	※※			
M + I ⅔	0	13	4	※	※	※	※	4	9	4					11	0	6	※	※	※	※

次に、攻撃の型における変化としては、O - D ⅔の減少、E - D ⅔の増加、そして N - P ⅔の過剰傾向のやゝ軟化がみられる。O - D ⅔の減少は欲求不満場面に対する自我機能の活動的反應の活発化を意味し、その歪力 (stress) を解消するための卒直な自我の発達を、E - D ⅔の増加による標準値への接近から推測することができる。また、N - P ⅔の減少は i 反應の減少によるもので反應の方向でふれたとおり罪償感が軽減し、全体的には、より建設的な解決を求めることが標準に近づく傾向はあるが、しかし、その問題解決の要求を他人に求める傾向があまりにも強いことはいせんとして変わらない。

3) 超自我因子欄の変化について

〔仮説 2 〕の検証において超自我因子欄を把握された傾向は、その発達が他の評点因子に比較して特に遅滞していることであつた。しかし、特殊学級における 5 か月間の教育効果は、とくに、精神薄弱児の超自我の発達にみることができるようである。換言すれば、かれらの精神発達、社会適応性の発達を促進させたといえる。表 18 は、超自我因子の変化を比較するためにつくられたもの

表 1 8 超自我因子の変化 (⅔)

	E	I	E+I	E-E	I-I	M+I
対象群 (1)	3.4	2.6	6.3	14.7	17.3	28.0
対象群 (2)	4.0	4.0	7.9	16.3	17.5	30.2
標準	6.3	7.1	13.4	19.7	9.8	33.2

であるが、I - I ⅔因子を除く他の因子は、すべて標準値への接近の傾向を示している。表 1 7 の超自我因子の変化をみても、第 2 回のテストの結果は M + I ⅔を除きどの因子も標準範囲内に属するものが増加する傾向を示している。また、M + I ⅔は、高くなる傾向をみせているが、これは社会適応性が高くなっていくことを意味している。ただ、表 1 8 で I - I ⅔が、標準値から大きくはなれており、変化を

示さないことから、やはり自責、自己非難の気持ちが過剰である傾向を保っており、社会不適応の傾向

表 19 反応転移の比較

被 験 者 回	1	2	3	4	5
1 ①			$\frac{-0.50}{-0.33} \rightarrow m$	$\frac{-0.65}{-0.47} \rightarrow M$	
1 ②		$\frac{-0.33}{-0.50} \rightarrow E$	$i \rightarrow +1$	$\frac{-0.47}{-0.65} \rightarrow E$	$N-P \rightarrow +0.40$
2 ①					$N-P \rightarrow 0.67$
2 ②		$\frac{E+0.57}{-0.50} \rightarrow M$	$e \rightarrow +0.75$	$\frac{E+0.64}{-0.51} \rightarrow M$	$N-P \rightarrow +0.38$
3 ①		$E \rightarrow +0.75$	$e \rightarrow +0.33$	$\frac{E+0.55}{-0.45} \rightarrow M$	$-0.45 \rightarrow E-D$
3 ②		$E \rightarrow +1$		$\frac{E+1}{-0.41} \rightarrow M$	$-1 \rightarrow O-D$
4 ①			$e \rightarrow +0.60$	$\frac{E+0.41}{-0.53} \rightarrow M$	
4 ②			$e \rightarrow +1$	$-0.56 \rightarrow M$	$N-P \rightarrow +0.65$
5 ①		$E \rightarrow +0.33$		$\frac{I+0.43}{-0.38} \rightarrow M$	
5 ②					
6 ①		$\frac{-0.67}{-0.50} \rightarrow I$		$\frac{E+0.38}{-0.56} \rightarrow I$	$\frac{-1}{N-P} \rightarrow O-D$
6 ②		$M \rightarrow 0.50$		$E \rightarrow +0.50$	$N-P \rightarrow +1$
7 ①			$-0.50 \rightarrow e$	$-0.56 \rightarrow M$	
7 ②		$E \rightarrow +0.60$		$\frac{E+0.36}{-0.60} \rightarrow M$	
8 ①		$\frac{E+0.33}{-0.50} \rightarrow I$	$e \rightarrow +0.60$	$\frac{E+0.45}{-0.33} \rightarrow M$	
8 ②		$E \rightarrow +0.50$		$\frac{E+0.67}{-0.33} \rightarrow M$	$N-P \rightarrow +0.50$
9 ①			$e \rightarrow +0.33$		$-0.40 \rightarrow O-D$
9 ②					
10 ①				$I \rightarrow +0.37$	
10 ②				$M \rightarrow +0.33$	
11 ①	$\frac{-0.50}{-0.33} \rightarrow M$	$-1 \rightarrow I$	$i \rightarrow +1$		$\frac{-0.57}{-0.71} \rightarrow O-D$
11 ②			$i \rightarrow +0.50$		$\frac{-0.71}{N-P} \rightarrow E-D$
12 ①		$E \rightarrow +0.75$			$\frac{-1}{E-D} \rightarrow O-D$
12 ②			$e \rightarrow +0.43$	$\frac{E+0.33}{-0.33} \rightarrow M$	$E-D \rightarrow +0.3$
13 ①		$-0.64 \rightarrow E$	$e \rightarrow +0.85$	$-0.33 \rightarrow M$	$\frac{0.36}{N-P} \rightarrow E-D$
13 ②					
14 ①		$I \rightarrow +0.33$	$e \rightarrow +0.33$	$-0.33 \rightarrow M$	
14 ②		$E \rightarrow +0.50$	$e \rightarrow +0.67$	$\frac{E+0.60}{-0.33} \rightarrow M$	
15 ①		$E \rightarrow +0.60$	$-0.33 \rightarrow m$	$-0.41 \rightarrow M$	
15 ②				$\frac{E+0.33}{-0.67} \rightarrow M$	
16 ①		$E \rightarrow +0.33$		$\frac{E+0.33}{-0.33} \rightarrow M$	
16 ②				$\frac{E+0.33}{-0.33} \rightarrow I$	
17 ①					
17 ②	$E \rightarrow +0.39$				$\frac{O-D+0.41}{-0.33} \rightarrow E-D$
					$-0.56 \rightarrow N-P$

の原因はこのあたりに潜んでいるように思われる。

このように超自我因子は望ましい方向に発達してきているとはいえ、いまだその発達が遅滞しているということは否定できない。

#### 4) 反応転移分析欄の変化について

反応転移分析欄は、前にもふれたように、情緒の傾向や欲求不満耐性に関係するものであつて、再テストの結果を初回の結果と比較することによって、その間における教育、再教育、矯正教育、心理療法、治療等の効果の測定を行なうことができる。

第1回の結果(表14)と第2回の結果とを比較すると、第1回で特に目立っていたEから遠ざかるもの、eから遠ざかるもの、Total Mに向うもの、E-D反応に向うものの割合が、それぞれ(4 1.1→2 9.4)、(3 5.3→2 3.5)、(6 4.8→4 7.0)、(1 7.6→5.9)と減少する傾向をみせ、ローゼンツアイクとミルモ어의平均値に接近してきている。しかし、Total Eから遠ざかりTotal Iに向うものゝ割合がそれぞれ(3 5.3→5 2.9)(1 1.8→2 3.5)と増加し、全体的には好ましい変化を示している中で、これだけ望ましくない変化をみせ、外に向けていた攻撃を、ますます自分自身に向ける傾向が強くなっていることを表わしているが、その内容を考えと、プロフィール欄の変化のところでみたように(I反応の増加やi反応の減少から)、むしろ望ましい変化をしていることがわかる。さらに、個々の被験者の反応転移の変化(表19)を検討すると、被験者5; 6, 9, 11, 13, 15, 16, は、初回に多くの転移があり、情緒不安定の傾向が著しかつたが、第2回の結果では転移数が減少し情緒が安定してきている。また、被験者1, 2, 17は、初回当時の社会成熟度の低さに自



覚の芽生えが感じられる（反応転移の激増）が転移内容をみると情緒的に変動の波が大きく、特殊学級入級による情緒的な開放期にあるものと考えられる。このように反応転移の変化からみても、情緒不安定の傾向は安定の方向に向かい、また社会性の低いものも成長の芽生えがうかがわれ、特殊学級の人格面における教育効果を認めることができよう。

以上、特殊学級における精神薄弱児の人格面にみられる変容を、GCR、プロフィール欄、超自我因子欄、反応転移分析欄の項目ごとに検討してきたが、共通していえることは、それまで諸要因によって抑圧され、時として衝動的に解消されていた欲求不満が、受容的環境の中で抑圧から開放されより建設的問題解決を求める傾向になり、情緒的にも安定し、社会適応性も発達する傾向を示しているということである。したがって、個人差の存在を軽視することはできないが、全体的傾向として〔仮説-3〕を採択することができる。

### 〔参考資料〕 一精神薄弱児の人格変容の事例

このケースの児童は、本研究の対象者の中のひとりのものである。

小学校特殊学級に在籍する5年生の男子児童、特殊学級入級は4年生の11月からであって、それまでは特殊学級未設置校に在籍して、学習および性行面において問題児として取り扱われてきた児童である。家族構成は父、母、兄2人、本人、弟1人の6人家族で経済的にも概して問題はないもよう。本人の生育歴をみると出生期は正常、乳児期には發育遅滞、生齒12か月、始歩18か月、ことばはほとんどなし、幼児期になって、2才頃小児ぜん息、4才頃夜尿症、4才になり漸くことばを話し始めた。児童期は、学齢に達し就学、ほとんど欠席なし、4年生の11月転校、特殊学級入級、この頃より夜尿がなくなり、ぜん息発作も少なくなった。学校において、時々カットして暴れるが、それにはかなりの理由もあるらしい。たとえば言語障害に対する劣等感からの発作的行動とも考えられている。知能程度はる（魯）鈍級であって、A.L.Luriaの精神薄弱児の性格行動類型分類の観点からみると、全般的特色運動機能、言語機能、感情および対人関係、一般学習活動のすべてが興奮型と判定される。このような生育および性行上の問題をもつ児童が、特殊学級における約4か月半の期間（6月～11月）にどのように変容したかをP-F Studyによってとらえてみたい。（表2.0.表2.1）

#### 解 釈（第1回 昭和41年6月28日）

GCR%は20.8%で問題にならない程非常に低く（同年齢標準58.3%）、欲求不満に際しての反応は全く異常で不適応児である。各反応の型（障害優位、自我防禦、要求固執型）は普通児童の平均%と大差はないが、攻撃の方向において著しく歪んでおり、反抗・敵意を直接相手にむけることをあらわすE%が標準の倍近くでていることと、それに反して、自責、自己非難をあらわすI%が標準の3分の1とたいへん低く、攻撃をうまくはぐらかしてしまうM%も標準の半分以下であって、自己反省心がなく、わずかな不満ですぐに暴言、暴行に出る傾向がきわめて強く、欲求不満耐性の弱さが指摘できよう。このことは超自我因子欄が標準と大きくずれていることからわかる。すなわち、E、I反応がなく超自我が未発達、E+IおよびM+I因子が非常に低いことで社会的、精神的発達が遅れ、E-EおよびI-Iの過剰から自己反省心に乏しく、幼稚な攻撃反応が多いといえる。また、e反応の過度の表明は依存的で、とかく自らの努力で問題の解決に向わず、ひとに訴え助力を求めようとする傾向を意味して

表 20〔第 1 回〕

(プロフィール欄) S 4 1. 6. 2 8

	O - D		E - D		N - P		合 計		%
E	1.5	4	6.5	9.5	4	6	12	19.5	81.3
	2.5		3		2		7.5		
I	0	0	0	2	0	0	0	2	8.3
	0		2		0		2		
M	0	1	0	0.5	0	1	0	2.5	10.4
	1		0.5		1		2.5		
合 計	1.5	5	6.5	12	4	7	24		100.0
	3.5		5.5		3				
%	20.3		50.0		29.2		100.0		
(超自我因子欄)					(反応転移分析欄)				
$\underline{E} \quad \text{---} \quad 0 \quad \text{---} \quad 0 \quad \%$					1 なし				
$\underline{I} \quad \text{---} \quad 0 \quad \text{---} \quad 0 \quad \%$					2 $E \pm 0.33$				
$E + \underline{I} \quad \text{---} \quad 0 \quad \text{---} \quad 0 \quad \%$					3 $e \pm 0.33$				
$E - \underline{E} \quad \text{---} \quad 9.5 \quad \text{---} \quad 39.6 \quad \%$					4 なし				
$I - \underline{I} \quad \text{---} \quad 2 \quad \text{---} \quad 8.3 \quad \%$					5 $\frac{-0.40}{12} O-D$				
$M + \underline{I} \quad \text{---} \quad 2.5 \quad \text{---} \quad 10.4 \quad \%$					$GCR = \frac{2.5}{12} = 20.8 \quad \%$				
(備考) WISC 知能診断検査 IQ63 (入級時)									

表 21〔第 2 回〕

(プロフィール欄) S 4 1. 1 1. 1 1 1

	O - D		E - D		N - P		合 計		%
E	0	0.5	5.5	11	3.5	5.5	9	17	73.9
	0.5		5.5		2		8		
I	0	1	2	3.5	0	0	2	4.5	19.6
	1		1.5		0		2.5		
M	0	0.5	0	1	0	0	0	1.5	6.5
	0.5		1		0		1.5		
合 計	0	2	7.5	15.5	3.5	5.5	23		100.0
	2		8		2				
%	8.7		67.4		23.9		100.0		
(超自我因子欄)					(反応転移分析欄)				
$\underline{E} - 1.5 - 6.5 \%$					1 なし				
$\underline{I} - 1.5 - 6.5 \%$					2 なし				
$\underline{E} + \underline{I} - 3 - 13.0 \%$					3 なし -				
$E - \underline{E} - 9.5 - 41.3 \%$					4 なし				
$I - \underline{I} - 2 - 8.7 \%$					5 なし				
$M + \underline{I} - 3 - 13.0 \%$					$GCR = \frac{6}{12} = 50.0 \%$				
(備考) WISC 知能診断検査 IQ 68 (S41.11.29)									

いる。しかし、ある程度心の中では攻撃的に出ることと、攻撃的に要求固執することのわるさを感じており、心の中にその意欲に対する葛藤がみられ、自我機能の活動的な反応の率直な表明に対し、制止機制 (Suppression) がはたらいっている (後半に E, e 反応が減少, O-D 反応が増加していることから) ことがわかる。

このように全体的にみて、全く精神発達の遅れた社会成熟度の低い児童であるといえる。

#### 解 釈 (第 2 回 昭和41年11月11日)

前回より約 4 か月半経過し、その間に反応の型、攻撃の方向とも変化していることがうかがえる。まず、前はきわめて低かった GCR% は、2 倍以上になり同年齢標準の範囲内によくはいる位に高くなり、社会適応性が伸びてきたことが目立つ。攻撃の方向においても、欲求不満の原因を、他人とか環境のせいにして、敵意を直接相手に向ける傾向はまだ強いが、だいぶ弱まり、それに反して自罰傾向や自己反省心がでてきているといえる。しかし、前回もそうであったが、いまだ依存傾向は強く、自分の力で問題解決に努力しようとする兆がない。反応の型においては、前は標準と大差はなかったが、今回は相違がみられる。ここでは制止機制のはたらきが弱まり抑圧による防衛機制もなくなり妥協することなく、欲求不満場面において、ストレスを解消するために率直に自我を強調する傾向がでてきている。また、超自我の発達も認められ、欲求不満に対して適度に攻撃的に否認し、わるいと思いながらも

いいわけをすることによって、わが身を守ることもできるようになり、全般的にみて社会性は発達してきているが、攻撃のしかたが幼稚であって、精神的には、その発達に未熟さが感じられる。前回みられた反応の転移はなくなり、情緒的に安定してきておりフラストレーション・トレランスも高まり、衝動的行動はおさまりつつある傾向にあることが推測され、このことは学級担任の報告と一致している。このように全体的に、よりよい人格の方向への変容を示しているとはいえ、過度の外罰傾向、自主性の欠除などの歪みがあり、さらに、今後の教育効果が期待される。

この一事例から、パーソナリティに欠陥をもつ精神薄弱児自身の成長への衝動を感じずにはいられない。それは決して主観的なものではなく、GCRの変化をはじめとする全体的人格変容をP-F Studyの検討による結果から確かめられることである。そして、それはまた単なる反応の量的変化でもない。かれの反応語から「泣く」「いやだいやだ」がなくなり、「いゝんだよ」というよう寛容を意味することばがあらわれてきたことにおいてもうなづけるのである。このように、精神薄弱児の人格形成に特殊学級は、大きな役割を負っていることを確かめるとともに、一方では、また精神薄弱児自身の、それなりの成長発達の可能性をも信じるところである。

## む す び

Rosenzweig P-F Studyによって、精神薄弱児の人格特徴を把握し、特殊教育によるその変容の傾向を明らかにすることを目的とした本研究は、その顕著なる人格特徴およびその変容を、統計的分析によって明確に把握することはできなかったが、その傾向のいくつかを把握することができ、今後、この研究を推進していくうえでの手がかりを得ることができた。以下、その概要を要約して記述する。

### P-F Study (児童用) の精神薄弱児適用について

- 1) 関係の把握、解決の発見、知覚体制の再編成(洞察)の能力が劣ることから、刺激場面の理解力は劣るが、個別面接法による実施、そこにおける場面の説明のしかたなどの実施手続を明確にし、それにそって施行すれば、精神年齢4才以上の精神薄弱児にも適用可能である。
- 2) 無効反応、無応答の出現する場面の共通点として、フラストレーション・エイジェント(欲求不満原因者、agent)の認知の困難性が考えられる。

### P-F Studyによる精神薄弱児の人格特徴について

- 1) GCR(社会適応度)の高さは、児童標準範囲をはずれるものが多く、それらは範囲より高すぎるものと低すぎるものがあり、その間には統計的に有意な差はなく、いずれも社会性の発達が遅れており、全体平均としてもかなり低いといえる。
- 2) GCRの合致内容をみると、I反応の合致が多く、欲求不満の原因をすべて自己に向ける傾向(劣等感など)が強すぎ、社会適応は困難である。
- 3) GCRと知能の相関関係は、本研究においては、ほとんどなかった。
- 4) プロフィール欄における大きな特徴は、I反応とe反応の多いことであって、精神薄弱児の内罰傾向と依存傾向がはつきり指摘できる。
- 5) 本研究で算も明らかな特徴を示したのは超自我の未発達である。なかでもI反応の出現が少なく

(I-I) 因子が多いことは、自己弁護ができずに内向し、精神的にも社会的にも成熟が遅滞していることを意味している。

6) 反応転移は全体的に多く現われ、情緒的に不安定の傾向を強く表わしている。

7) なかでも後半 e 反応が減少し、Total M が増加するものが多く、依存感情を自ら抑圧し表面的は表わさないようにする自己偽瞞を伴った抑圧 (Repression with self-deception) の機制で、愛情喪失の不安をもった自己を防衛しようとする傾向が強い。

#### P-F Study による精神薄弱児の人格変容について

1) GCR が標準に接近し、社会適応性の発達の傾向がうかがえる。

2) 過度の罪償感が弱まり、不平不満の表明阻止が適度に行える傾向があり、欲求不満耐性 (frustration tolerance) 培われ、自他共に許す寛容の精神ができ社会性が伸びてきている。

3) 超自我の発達が促進され、欲求不満場面に対する超自我の活動が活発化しつつある。

4) 助力を求める依存的傾向は変化せず、特殊学級の庇護的性格がうかがえる。

5) 情緒の変動は安定化への傾向をみせ、特に、社会性の成熟が遅れているものに、自覚の芽生えのあることが感じられる。

このように、精神薄弱児に P-F Study を適用した結果、かれらの人格には、正常児に比して、大きなゆがみがあり、ここに特殊学級における指導の特殊性とあわせて困難性をうかがい知ることができる。本研究は、その P-F Study 実施間隔がわずか 4 か月半～5 か月という短期間であり、しかも対象児童の人数および抽出条件の不備等いろいろの問題はあるが、事実、特殊学級に在籍している精神薄弱児らが、それぞれ独自の人格変容の道程をたどっているということを、傾向として把握することができた。今後本研究を発展させるためには、第 1 に、対象児童をいかなる基準で抽出するか、その選択性の問題がある。このことについては 2 つの立場が考えられる。1 つは、特殊学級そのものを対象とする立場であり、他の 1 つは、個人そのものを対象とする立場である。このいずれをとるかは、研究内容によって決定されるであろうが、いずれにしても研究対象の選択性の要因は、その研究結果を左右する主要なもの 1 つと考える。これと関連してその第 2 は、対象を個人そのものとする場合には、当然類型分類が欠かせないものとなってくるようである。本研究をすすめている途上このことが念頭をはなれず、本研究の結果が明確なものとならなかった原因もこの辺にあったように思える。第 3 は、精神薄弱児の人格変容は、入級後比較的早期に起こるものと思われる。したがって、対象児の選定に当っては、特殊学級における教育期間を考慮するとともに、入級時（できれば入級前）から長期間にわたる追跡的研究方法が必要である。さいごに、そこで使用される測定用具が問題となろう。その妥当性、信頼性を高めるための補助的資料の活用を重視しなければならない。これらの問題はすべて本研究の反省に基づくものである。換言すれば、本研究においては以上のような前提条件の不備が認められる。今後はこれらを少しでも改善して、条件統制を厳密にするよう努力したいと考える。

おわりに、この研究調査を実施するにあたり、積極的にご支援ご協力をいただいた研究協力校の校長先生および特殊学級担任の先生方に対し、深く感謝の意を表するとともに、日ごろの特殊教育推進のためのご努力に敬意を表するものである。この研究を担当し、執筆したのは白井 稔である。

〔参 考 文 献〕

- |         |                                    |         |
|---------|------------------------------------|---------|
| 住田勝美 他  | ローゼンツアイク人格理論                       | 三 京 房   |
| 住田勝美 他  | ローゼンツアイク P-F スタディ 使用手引 (改訂版)       | 三 京 房   |
| 一谷 彊    | Rosenzweig P-F Study による精神薄弱児の人格特徴 | 京都学芸大学  |
| 一谷 彊    | 人格要因分析的, 実験的並びに臨床的研究               | 京都学芸大学  |
| 三本安正    | 精神薄弱児の教育                           | 東京大学出版会 |
| 伊藤隆二    | 精神薄弱児の心理学                          | 日本文化科学社 |
| 松本金寿 他  | 精神薄弱児 (特殊児童双書 I)                   | 明治図書    |
| A.L.ルリヤ | 精神薄弱児                              | 三一書房    |
| A.フロイド  | 自我と防衛                              | 誠信書房    |
| (雑誌)    | 精神薄弱児研究 (No 101, 102-1967)         | 日本文化科学者 |